

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第137号 [2016年7月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章 22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第137号をお送りします。今月は少し早目に集会所が持たれ、ルカによる福音書6章の続き(27節-36節)「あなたの敵を愛しなさい」のテキストについて、大阪姫松教会の藤田英夫牧師のメッセージをもとに学びました。

敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい

当時のユダヤ人の常識として、隣人(同じ民族、同じ信仰、同じ価値観を生きる人たち)を愛し、そうでない人々(敵)を憎むという考え方がありました。しかし聖書が言う「隣人」は仲間だけを指すのではないし、また「敵を憎め」という言葉は聖書のどこにもありません。聖書が言うのは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」です。しかし、自分を思いやるのと同じレベルで他人を愛するような、それほど愛を向けられる対象とは誰なのでしょう。人々は、それは同じように自分を愛してくれる相手だと考えていたのです。しかし主イエスはここでははっきりと命じました。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい」

この私を迫害しているその相手のために祈らなければならない。それが隣人を愛することなのだとと言われても、「それはとてもできない」と誰もが思うでしょう。ここで私たちの心は閉じ、「人間だからできないのは当たり前だ」と言って自分を納得させてしまう。つまり私たちは実は、それほど愛することにおいて無力なのです。

それでも一方で、主イエスが仰るような愛の心が持てたならどんなに良いだろうか。今ある痛みのどれだけを消すことができるだろうと感じていませんか。敵なら傷つけ殺しても気にしなくて良いという考えが蔓延している社会を生き、実際にそういう事を物理的・心理的に実施して更に心を痛めている私たちは、本当はこの環境から救い出されたい。そう願っているのではないのでしょうか。主イエスの言葉が無理だとわかっている、今の現実を少しでも変えられるならどんなに嬉しいか。そう思うのであれば、私たちは「敵を愛せよ」というこの命令を理想論だと聞き流すことはできません。



今の現実が一気に変わることはなくても、努力次第で私たちの進む道が今までとは違う、別の所に向かっていく。そのような変化を、神を信じ従うあなたなら可能だと、主イエスはそう仰っているのです。

これを可能にするのは、文字通り自分に敵対していた人々を深く愛し、まさにその人々のために命を失うほどの愛を示してくださった主イエスの愛を受けていることがカギになります。人はまず愛されなければ他人を愛することができるようになりますが、愛されれば同じ愛を他人にも示すことができるようになるからです。どんなに神を否定し神の敵のような生き方をしてきた人でも、神の愛ほど深く大きな愛を受けた時、人は自分の罪を知って悔い改め、神の前に砕かれて、神を喜びとしながら生きる者に変えられます。そしてそれはまさに私たち自身の身に実際に起きたこと。そうやって私たち自身が造り替えられる中で、私たちは愛の中に生きる者となっていくのです。

また神は完全なお方ですから、神様が私たちに注がれる愛も、またその愛に基づく交わりも永遠に変わることがありません。たとえ私たちが途中で道に迷って心折れてしまったり、神から遠く離れてしまうことがあっても、神の心は決して変わらず私たちを愛し続けておられる。だからこそ私たちはいつでも神のもとに帰ることができ、神の愛を再確認し、隣人を、敵を愛する努力を続けていくことができるのです。

大阪姫松教会、藤田英夫牧師